



はあ...♡

お姉さんのお尻、
すべすべで気持ちいい♡

スリ♡
スリ♡

ひゃうっ！

なんで...
女性用車両...なのに...!!

きゃはは！
だからじゃん！

男なんかいたら
お尻出せないでしょ？

うふふ、そうよ？

女しかいないんだから
恥ずかしがらずに
楽しみましょう♡

そんな...

ああんっ！

ひゅっ
え

ひゅっ



はあ...はあ...♡

熱っぽい息を背後に感じながら
私は下半身をまさぐられる。

やっ...んっ...

まさか女性用車両に乗って
こんな目に遭うなんて...

その女の子は
ふにふにと感触を楽しみたいに
私のふとももやお尻を撫で回して—

っ
!?

あろう事か
パンツに手をかけて
するりとずり下ろした...!

あ…

たくさんの人が乗る電車の中、
1番恥ずかしい部分を
さらけ出しちゃって…

スカートを履いてるから
誰から見えはしないけど、
この子が何をしてるか
わからない。

驚きや恐怖で
ろくに抵抗もできずに
いるんだけど—

なんかちょっとだけ、
それとは違うドキドキを
体の奥に感じるような…？



んむ……ちゅぷっ……

耳元で水気を含んだ音がする。どうやら二の子、自分の指を舐めてるみたい。

パンツを下ろされ、次にされる事を想像して身構えていると

案の定舐めていた手が後ろからスカートに差し込まれて――

あっ……んんっ……!?

唾液でぬるぬるの指がお尻の穴に押し付けられた!?



うそ…そっち…!?

想定外の部分に触れられて
ビクンと体が跳ねる。

ゆっくり円を描きながら、
入り口に唾液を
塗りつけるみたいに
指が這うのを感じる…

彼女はいったん手を離して
またちゅぽちゅぽと指を舐め、
その指がお尻に帰ってくる。

今度はほんの少しだけ
お尻の中まで指が入ってきて
唾液を塗りつけながら
入り口をマッサージし、
またその指を舐めて唾液を補充する。

指を少しずつ奥に進ませながら
何度もそれを繰り返し、
入り口から中まで
とろとろにほぐされていく…

はあ…っ
はっ…んんっ…

私は未経験の感覚に
声が出そうになるのを
必死に我慢するしかできない…

しばらく続けた後
もういっとうぶんと判断したのか、
一気に奥まで指が入ってきた……！

念入りに準備されたから
痛くはない。
それどころか――

やばい、私……

感じちゃってる……？

ふっ……んうっ……！

指の根本まで入ると
ゆっくり入り口まで
引き返していく。

出し入れをしながら
指の腹を押し付けて
お尻の中を
リズミカルに刺激される。

あっ……んっ……
あっ……！

知らない子に
お尻を犯されている。

しかも一歩間違えれば
それを周りの人に見られる。
いやもう気づいてる人も
いるかも……

この状況と
お尻から伝わる
淡い快感に、
明らかに私の胸は
高鳴ってる。

だめ…
イっちゃいそ…!

女の子の指で
お尻を突き上げられると同時に
私はあっけなく達してしまった…

やだ…
これじゃ変態だよ…!

頭では拒否したくても、
体の奥で感じていたドキドキは
どんどん強くなっていく。

一定のリズムでお尻を
刺激されるたび、
下腹部が熱くなる。

こんなので
イっちゃうなんて…

さっきより興奮気味の
吐息を耳元に感じながら、
私は絶頂の余韻と
自己嫌悪に浸った—













きゃっ!?
ちょ、なに!?

あ、あんまり
騒がないでください...

おとなしくしてれば
その...
ひひひ事はしません...

あらあ?
もしかして
可愛い千カンさん?

はあっ!?

ていうかあなた、
毎日隣に座ってくるよね?
まさかずっと狙って—

わたしの事はいいですよ!

千、千カンされてるんですから
おとなしくしてください...

ズレ
ズレ



ひゃっ!?

な、なに!?
お尻...!!

しっ、
あんまり
暴れないで♡

ちよ、
あなた撮ってるの...!?

さわ
さわ

てい
くっ

ふふ、今晚の
良いおかずになりそ♡

なんなの
この状況...!?





友達のみやちゃんと
電車に乗ったある日、
スマホを眺めていた私の視界の隅で
みやちゃんのピンクの服が
もぞもぞと動いていた。

しばらく気にしてなかったけれど、
ふと顔を上げると――

え……!?

スリッの女性が
背後からみやちゃんの胸を
驚抱みにしている……!

「んっ……はあ……っ!」

おとなしい性格の
みやちゃんは抵抗できないのか、
されるがままだ。

彼女の
大きなおっぱいは
普段から人目を引く。

だから今日も
女性用車両に乗ったのに……!

スーツの女性は
もう我慢できないと
言わんばかりの手つきで
ミヤちゃんの服をまくり上げた。

服と同じ色にぶっくり膨らんだ
その先端まで見るのは
私も初めてで、
思わず生唾を飲んでしまう。

「んっ…んっ…！」

女性が直接おっぱいに触れ、
乱暴に揉みしだく。

「ひゃ…っ…」

ぶるんっ
という音が聞こえてきそうな勢いで
おっぱいが飛び出してくる。

助けなきゃ…

頭ではそう思っているのに、
女性の手の中で
やわらかく形を変えるおっぱいから
目が離せなくなっていた。

「あっ、くっ…」

女性の指が乳首に触れる度、ミヤちゃんの体がビクッと跳ねる。

普段一緒にいる親友のえっちな姿に、お腹の奥が熱くなっていくのを感じる。

やだ私…、
なに興奮して…!

そんな目で
見ているからか、

ミヤちゃんの口元が緩み、
吐息に熱がこもってきている
ような気がする…?

ミヤちゃん、ごめんね…
私…私…!

私は心の中で謝りながら、
いやらしく弄ばれる
友達を目に焼き付けた—









はあああ♡
こんな巨乳姉妹と
乗り合わせるなんて
ラッキーすぎ♡

ホントな♡

せっかく動画にしてんだから
もっと激しく擦り合わせなよ♡

ずいゆ

ずいゆ

あっ、あんっ！
お、お願い！！

私はいからっ！
妹は離してあげて！！

何…
言ってるの…!?

あんたら…んっ、
これ以上お姉ちゃんに
何かしたら
許さないから…!

あはは！

そんなに
お互いが好きなら
終点までひっついてなっ♡



「んっ…はあっ…!」

ある日の電車内、
私は背後から
胸とあそこをまさぐられている。

女性しか
いないからと
完全に油断してた…!

敏感な部分を
執拗に責められ
体がビクビクと
反応してしまう。

「んっ、ふう…!」

私は反射的に両手で
つり革を掴み体を支える。

幸い前に座っている子は
本に視線を落としているため、
変に暴れなければ醜態を
見られる事もないはず。



しかしそれによって
一切抵抗できない
体勢になってしまい、

私は手早く服を
はだけさせられ、
下着も下ろされてしまう。

背後の女の子が
息を荒げなら
乳首とクリトリスに
直接触れてくる。

刺激がより明瞭になり、
じわじわと快感が
頭を支配していく。

「ひあ……っ!?」

彼女は同時に
首を伸ばし、
れろれろと腋を舐めてくる。

「あっ、あっ……!」

初体験の感覚に
体の奥が急激に熱くなってくる
のを感じる。

「あっ……やっ……!」



「んんんっ、んあっ、
はっああっ……！」

私はそのままあっさり
イカされてしまった。

「うそ、私……」

こんな状況で
絶頂してしまうほど
興奮する自分に戸惑う。

「ちゅっ、んあ……」

しかし
女の子が再び
舌を這わせてくると、

余計な考えも
舐め取られるように
頭が真っ白になっていく。

「はっ、んっ……！」

ちゅくちゅくと
絶頂直後のあそこも
優しく刺激され続け、

私はまた両腕を上げたまま
痺れるような快感に
身を任せた――





